

ほんしめじ優良品種選抜について

○片野高志

1. はじめに

県オリジナル品種のほんしめじ「ふくふくしめじ（福島 H106 号（以下、H106.））」は県内生産者によって農業用ハウス内で自然環境を活かした栽培が行われているが、H106 と収穫期が重複せず、収量が優れた新品種が求められている。今回は R 3～7 年度に実施したほんしめじの優良品種選抜試験の結果について報告する。

2. 調査方法

H30～R 6 に収集したほんしめじ野生株 35 株を組織分離して種菌を製造した後、広葉樹チップ培地を 450 ml ガラスビンに充填し、殺菌後に接種した。これらを空調栽培し、きのこの形成能力を確認した。培養は培養室で $22 \pm 2^{\circ}\text{C}$ 、湿度 60～70% の条件で 120 日間行った。発生操作及び管理は、事前給水した鹿沼土中粒を用い、菌床上面から 1～2 cm ほど覆土した後、発生室において $15 \pm 2^{\circ}\text{C}$ 、湿度約 100% の条件で実施した。

上記試験の後に、広葉樹チップ培地を 1400 mlPP ビンに充填し、殺菌後に R 6 年度までにきのこの形成能力が確認された野生株 7 株（A、B、C、D、E、F、G）を接種し、空調栽培を行った。栽培条件は、上記試験と同様とした。調査項目は、きのこの発生率、1 ビン当たりの平均収量（未発生を除く）とした。

3. 結果及び考察

R 3～7 年度に新たにきのこの形成能力を有する野生株が 12 株確認された。

A～G の野生株 7 株中 6 株できのこが発生し、発生率は A78%、B33%、C 5 %、D 発生無し、E100%、F100%、G93%であ

った。1 ビン当たりの収量は、過去に同条件で栽培を行った H106(R 5 参考)と比較して A はほぼ同程度であり、F は約 11g、B は約 18g、E は約 37g、G は約 52g、C は 68g 少なかった。発生しなかったビンを考慮すると、本試験で最も 1 ビン当たりの期待収量（1 ビン当たり収量×発生率）が高い野生株は F だった

（図-1）。今後は農業用ハウスにおいて自然環境条件での試験を重ねて優良品種選抜を進める予定である。

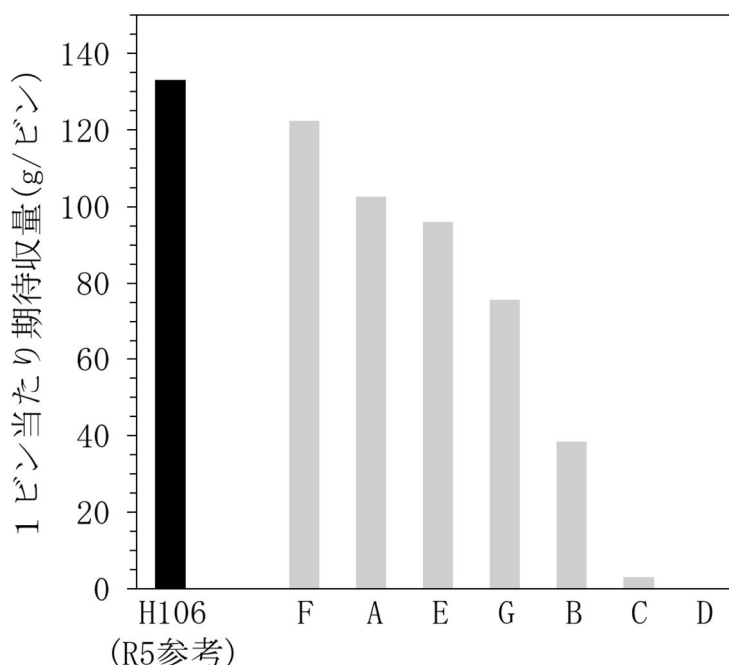


図-1 1 ビン当たり期待収量